

隠岐の来待石造品について

多 根 令 己

1. 「隠岐国神社秘録」

隠岐国では、幕末の国学の勃興によって、明治2年から3年にかけて、徹底した廃仏棄釈が行われた。

このとき、村々の小祠に至る迄、詳細な神社調査が行われて教冊の本が残されている。

右隠岐寿氏所蔵原本により転写、今晩四時、島根県庁宿直室に於いて事おわんぬ

昭和27年1月13日 曾根研三識

とあり、昭和29年に200部謄写印刷されて関係者に配布された。

「道後神社巡察日記上」を引用すると、

「明治2年10月18日 朝雨少し降、夕方又少し降、西風けわし、

一、朝五ツ過、代村出立、人夫二人、荷物先送り、久見村付近迄一里不足の路、されど山路さかし、半途より道踏迷て、高き峯によち登り、また半途迄、六七町ばかりも後へ戻り、たどりて九ツ過、久見村に着、公文宅へ立寄、昼飯たべ、神主伴八幡文丸案内にて、直様出立、北方へ一町余り行、久養寺の前に、毘沙門の小祠有、神体なし、これより一町ばかり右へ登り、野津権現の小祠有、神体なし、こは此宮守社前忠左衛門が先祖、野津五郎左衛門と云者の霊社也とぞ、これより三町ばかり下り、浜辺に恵美須の小祠有、神体なし、これより三町ばかり、人家の傍に小祠有、地主のよし、又右へ少し行、人家の傍に、地主の小祠有、これより右へ廻り少し行、又小祠有、何もなし、又少し行、代村より越す路の傍に、小祠五つあり、何もなし、これより八町ばかりも上り、内宮の前なる山の上に、霧明の社也、神体なし、これより内宮の社へ参り、左傍に中祠有、熊野の社也、神体懸物の焼もの有、次に長社の小祠、何もなし、此社より二町ばかりも、山の絶頂に愛宕、住吉、三笠大山の三小祠有、此内三笠大山の社に天狗の像あり、これより下り、帰り路に、若宮の小祠有、これより公文宅へ帰り一泊。」

此の本の一部から、おそらく来待石と思われるものを若干拾ってみた。

飯田村

八幡宮 石の狛犬二つあり

熊野権現 中社なり、神体内に小金仏四つ、

外に石仏の八寸ばかりなる三軀、

大来村

三保大明神 中の大社、石狛犬二つ拜殿にあり、

諸浦大明神 大社 狛犬 木作二ツ、石作二ツ

都万村

天満天神 中の大社 石の牛一

金比羅之祠 小祠 石祠なり 栖屋入

石狛犬八ツ 羽翼ある異形のもの一
津戸村
花生大明神 中の大社 石唐獅子四
金毘羅祠 小祠 例の羽翼異形一 狐石二
稲荷之祠 小祠 石狐三
巖島大明神 中社 石唐獅子四
白鳥大明神 大社 石の唐獅子二ツ
西田村
切明大明神 中の大社 唐獅子二
有木村
天照皇大神宮 石小狐二ツ 狛犬有り

2. 有翼異形狛犬

隠岐にあった此の種の狛犬は、一畑薬師の本堂前に一対ある写真のような形をしたものだと思う。来待石で作られている。

この狛犬は、昭和37年に奉納されたものであるが、石工の銘はない。

この形の狛犬が、東京都築地本願寺のオリエンツ風本堂入口にも一対奉納されている。

この本堂は、昭和10年完成であるから、狛犬もその頃のものであろうか、建物によく似合っている。獅子は立ち姿で、翼も美事であり、花崗岩製である。

隠岐には、いつごろ此の型の狛犬が作られたものであろうか、謎の渡来系狛犬と言えよう。

また一畑薬師の狛犬を彫った石工は、なにを手本にしたものであろうか。

3. 島後の石仏

(1) 地藏院（西郷町）

地藏院は廃仏棄釈で廃寺になった。昭和6年に、大社町にあった浄土宗清久寺（誓願寺末）を移したが、今でも昔ながらの地藏院が通称となっている。

清久寺は、尼子清久の本願と伝えられる名刹であったが、明治5年の浜田地震で焼失、明治7年に再建されている。廃仏棄釈で寺を失った隠岐は全国各地から不用の寺を譲り受けている。大社町からは所讃寺も明治42年に黒木村に移転された。

地藏院境内の小堂にある不動明王は薩摩国の廻船中が奉納したもので、同国から運ばれている。

手水鉢は、宝永3年（1706）泉州佐野浦から運ばれた花崗岩製である。

境内には、来待石の狛犬一対、六地藏や青面金剛像もある。その他、鳥居や灯籠などは何れも来待石である。梵字を刻んだ大型の五輪塔は花崗岩製である。

(2) 国分寺

地藏など廃仏の爪跡を残したものが、寺のうしろや参道に並べられている。殆ど来待石製である。

(3) 道路脇の道祖神（西郷町、庚申塔）

(4) 常楽寺の地藏（中村）

明治初年に廃寺になったとき、中村川に投げ込まれたが、大正の初期の工事中に発見された。手

足等一部破損しており、頭部は後補されている。

4. 島前の石仏

(1) 国光寺山（海士町）

不動明王、大型のものと小型のものが一体つつある。

(2) 知々井の石仏郡（海士町）

馬頭観音、地藏、子持大師など30数体あり来待石製である。

(3) 保々見、清水寺（海士町）

登り口に、高さ1.5メートルの不動明王がある。「ちちい村 施主 村中 文化十三年（一八一六）」の刻名がある。

台座には、近くから湧き出る清水を汲むために小さな柄杓が備えられている。

湧き水は、天川とよばれる小さな流れとなっている。保々見地区では、村人の臨終のとき末期の水として汲まれると云う。

不動明王の傍に、庚申塔と、伊藤（井戸）平左衛門神塔の文字塔がある。

(4) 御波の百墓（海士町）

小高い丘の上であり、中央に2基の五輪塔が小屋掛けしてまつられ、周辺には五輪塔がぎっしりと立ちならんでいる。実際には二百基以上もあるといわれている。

近くの高みには、寺跡があり、周囲の竹藪の中にも多くの塔頭がみられる。そこらじゅうに石塔類の部分が転がっており、鬼気せまる思いがする。

来待石に似ているが、花崗片麻岩と鑑定された方もある。隠岐には石切場もなく、石工の後もないと言われているから、いずれにせよ内地から船で運ばれたものに違いない。

(5) 別府の大山さん（西ノ島町）

六地藏、馬頭観音像、半肉彫で頭上に宝馬と喜怒二面の馬頭印、怒眼、六臂である。

「露国海軍水兵之墓」建立大山明全中

栄光如海居士 明治三十八年六月

日本海海戦のとき流れ着いた水兵のもので法名からすれば、将校か下士官であったろう。平田市十六島の太光寺墓地にあるものに似ている。

(6) 常福寺（西ノ島町浦郷）

青面金剛 享和二戌（一八〇二）正月吉日

(7) 海士町海士東

青面金剛 文政十五年（天保三年か、一八三二）辰三月

(8) 海士町豊田入口

青面金剛

(9) 海士町崎の行者堂

青面金剛 万延元年庚申（一八六〇）八月

(10) 焼火山の町地藏（西ノ島町）

ここには御影石製のものが、一丁目から六丁目まで、来待石製のものが、一丁目から十八丁目、高さは五十五センチである。これは矢尾村（現西郷町西町）の信者が寄進したものである。

5. 単体双頭道祖神

西ノ島町の旧美田村と旧別府村の村境に、「たわけ」と称する所があり、地蔵が祭られている。その先が峠で、「才の神」が祭られている。石造の神祠は、高さ六三センチ、巾二センチ、奥行き二一センチ来待石である。

石祠の内には、大人の手ほどの男神と女神の石造双体像が置かれているが、半製品とみられる。あるいは露座のとき風雨にさらされて磨消したものかもしれない。

形は単体、双頭で今のところ、平田市に一体、奥出雲に九体発見されている珍しいものである。他県では、戸津川市に市指定文化財になっている道標をかねたものが一体あるだけである。

<参考文献>

- 昭和44年 伊藤菊之輔「隠岐の石造美術」
- 昭和59年 原宏一「野の石」
- 昭和53年 淀重美「島前の文化財第八号、島前の庚申塔」
- 昭和52年 “ 「同七号、道祖神」